

早大が「アジアと学ぶ」プログラム

紛争解決・社会変革のためのリーダー育成

文部科学省の補助事業「大学の世界展開力強化事業」の一つとして、早稲田大学が中国の北京大学、韓国の高麗大学と共同運営しているキャンパス・アジアプログラムは、多層的紛争解決・社会変革のためのグローバルリーダー共同育成に取り組んでいる。早大は日中韓の学生の取り組みを通して「アジアを学ぶ」ことから「アジアと学ぶ」プログラムへの発想の転換も図っていく方針だ。

キャンパス・アジアは2009年10月、第2回日中韓サミットで、日本側から3カ国で質の高い大学間交流を行うことを提言し合意したことがきっかけで始まった。現在、早大をはじめ17件のプログラムが採択されている。

早大のプログラムは、和解学プロジェクトのリーダーでもある梅森直之・政治経済学術院教授をプロジェクト・ディレクターとして17年度に本格始動した。専任講師は国際機関での勤務経験を持つ留学センターの小山淑子准教授。プログラムでは、紛争解決と社会変革をテーマに、東アジアやその他の地域における平和構築や社会問題解決について幅広く学んでいる。こうした通常の授業に加え、早大に在籍する正規生・留学生のほかにも参加する集中講座を、夏季と春季の年2回行っている。

梅森、小山両氏は今回のプログラムのキーワードを「感情」とし、単なるプレゼンテーションではなく演劇という形で表現させた。しかも、結論だけではなくプロセスを重視し、グループごとに表現を自由に考えさせた。梅森氏は「8日前に初めてあったような日中韓出身の学生が経験を共有し、共同で表現していく過程で大きな感動を得ていった。エンパワーメント（能力を最大限にまで引き出すこと）を高めることにつながる」と話した。

災害地域や紛争地で危機管理や復興支援を担当してきた小山氏は「援助従事者ばかりでなくリーダーにとって、ストレスマネジメントは国際機関でも未開拓の分野だ。『感情』は大切なキーワードな」と指摘。小山氏は育成したい人材像について「現場の機微や苦

森直之・政治経済学術院教授をプロジェクト・ディレクターとして17年度に本格始動した。専任講師は国際機関での勤務経験を持つ留学センターの小山淑子准教授。プログラムでは、紛争解決と社会変革をテーマに、東アジアやその他の地域における平和構築や社会問題解決について幅広く学んでいる。こうした通常の授業に加え、早大に在籍する正規生・留学生のほかにも参加する集中講座を、夏季と春季の年2回行っている。

そもそも早大がプログラムに申請した理由について、梅森氏は「それは差異よりも共通性に立脚した東アジア関連のプログラムが必要だと思ったからです」と話す。東アジア全体が経済発展と民主化を遂げることに、日中韓3カ国はますます結びつきを強め、現実

には多くの問題を共有するにいたっている。しかし、日中韓の間に存在する問題のみが強調され、その関係も悪化といったネガティブな視点で評価されがちだ。

東アジアは全体として「高度で持続的な経済成長」を達成することにより、世界経済の周辺からコアへと移行しつつある。これは、福沢諭吉が明治初期に日本の行く末を「脱亜」と表現したことになぞらえれば、いわば東アジア全体が「脱亜」したようなものであり、アジアという概念そのものの組み直しを迫るほどの大変動だ。この大変動に即応するかたちで、従来のプログラムが「アジアを学ぶ」ことに主眼があったとすれば「アジアと学ぶ」プログラムへの発想の転換が必要となってくる。日中韓の学生が、英語により、ともに紛争解決と社会変革について体系

的に学習していくアイデアはこうして生まれた。

このプログラムにいたった梅森氏の原点の一つが、米シカゴ政治学部博士課程時代にある。梅森氏は留学時、米国の学会における日本に対する関心の低下を身に染みて感じていたものの、米国をはじめとする世界の東アジア全体に対する関心は着実に増大してきたと感じたからだ。早大において東アジア発の特徴あるプログラムを実践することは、欧米の諸大学からも大きな関心を引き、そちらからの留学希望の学生を増やす最良の戦略でもあると考えた。

今年2月9日から8日間の春季プログラムは、早大、北京大、高麗大の学生が東日本大震災の被災地、岩手県の大槌町と釜石市をフィールドワークし、社会課題と解決方法などを演劇の形で表現する



早稲田大、北京大、高麗大のキャンパス・アジア春季プログラムで合同発表を終えた日中韓の学生たち（東京都新宿区の早稲田大学で2月16日）

ヨンすることを課題とした。長崎の場合、8日間のプログラムは全てアクティブ・ラーニング手法を用い、前半は2泊3日で長崎と軍艦島を訪れ、原爆や戦前・戦中の労働者問題について議論を重ねた。早大キャンパスに戻り、架空の共同歴史教科書の「1945年8月」に関する1ページを執筆するという課題に取り組んだ。参加学生は最終日に一般公開の成果発表会で、成果物である架空の歴史教科書の1ページを英語で発表した。

梅森氏によると、現在の東アジアの問題を考えるうえで歴史問題は避けて通ることはできないが、戦後70年以上を経過し、問題は歴史そのものであるよりも、それをどのように「認識」し「記憶」するかという次元に移行してきている。長崎と広島は夏季プログラムにおいては、日本において、戦争

がどのように認識され記憶されてきたかをともに確認し、それをみずからこれまで認識してきた歴史と比較することが課題となったという。

春季・夏季プログラム参加者の中から、さらに深く学びを深めたいと日中韓それぞれの国で中長期の留学をする学生も出ている。こうした学生をさらに増やすため、今年は3月に高麗大、4月に北京大での3大学合同による中長期留学プログラム説明会を実施。8月に早大と高麗大とで歴史認識を主題とする夏季プログラム、来年2月には早大で社会変革を主題とする春季プログラムと、3大学合同のワークショップを開催する予定だ。

文科省高等教育局高等教育企画課の進藤和澄国際企画室長は「キャンパス・アジアによる日中韓の学生交流は3カ国間の交流の基礎にもなる。共同学位などにより緊密な協力関係ができれば、本当の意味で交流の意義が出てくる。日中韓の交流を基礎にしたうえで、東南アジアで希望する大学の参加を可能にしたい」と述べ、アジア地域への拡大の実現可能性を示唆している。